

# 安全保障シンポジウム（前段）

## 東アジアの危機と日本の対応

—これからの防衛戦略を考える—

### 編集委員長

3月13日（火）、午後1時～5時、東洋学園大学本郷キャンパス・フェニックスホールで、偕行社主催の安全保障シンポジウムが開催された。

交通の利便性を備えた素晴らしい会場での開催であり、現役の自衛官を含め、熱心な参加者を得て実施された。今回のシンポジウムのテーマは、「東アジアの危機と日本の対応—これからの防衛戦略を考える—」であった。

中国では、全人代で憲法改正が行われ、5年2期であった国家主席の任期を撤廃し、習近平国家主席の長期政権が現実のものとなった。一方、わが国の喫緊の課題である北朝鮮情勢は、トランプ大統領の鶴の一声で、米朝対話が現実味を帯びている。また、ロシアのプーチン大統領の再選も確実視される中、北方領土問題の進展も厳しくなってきた。このような情勢の中、日本に求められる対応は厳しいものが予想され、シンポジウムも活気ある議論が交わされた。

開会にあたり富澤理事長から挨拶が

あり、関係者に対する感謝の言葉と、このシンポジウムに対する熱い期待が述べられた。

続いて、司会（コーディネーター）の偕行社安全保障研究委員会・火箱委員長（元陸幕長）から、基調講演者、細谷雄一氏（慶応義塾大学教授）、パネリストの森山尚直氏（前東部方面総監、元陸将）、堂下哲郎氏（前横須賀



地方総監、元海将）、福江広明氏（前航空総隊司令官、元空将）が紹介された。

シンポジウムは、細谷先生の基調講演によって開始され、続いて3人のパネリストによる発表、休憩を挟んで火箱コーディネーターの司会によるパネルディスカッションが行われた。

最後に質疑応答の時間があり、会場からの活発な質問に各先生が丁寧に答えられ、時間ギリギリまで有意義なシンポジウムであった。

以下、富澤理事長の挨拶、細谷先生の基調講演（要約）を紹介する。パネリストの先生方の発表内容（要約）は、次号を予定する。

### ●富澤理事長挨拶

皆さま、ご多忙の中、ようこそおいでいただきありがとうございます。

今回のシンポジウムは第9回目となります。実は、第1回のシンポジウムを開催した時、私は火箱安全保障研究委員長と同じ立場でありました。その時の基調講演者は、今年1月に自裁された西部邁氏でありました。

西部邁氏がここで何を語られたか。

彼は、「日本は核兵器を持つべきだ」と言われた。すると、今日も参加されていると思いますが、織田さんが「いや、今の状況では持つべきではない」

と反論された。すると西部氏は「軍人がそんなことを言うては駄目だ。こんな状況でクーデターをしないことがおかしい」と言われた。さすがに参加されていた自衛隊関係者も賛成する方はおられなかった。

彼は、独立性を重視された方であり、今回の自裁についても一部からは「自分の死に対して他人からとやかく言われたくない。自分の死は自分で決める」との彼の意思表示ではないか」とも言われております。

西部さんと正反対なのが、岡崎久彦氏であります。我々自衛隊の任務に「日本の平和と独立を守る」と書いてありますが、これが完全に両立することはないので現実であります。西部氏が「この独立こそが大事だ。独立のために必要なら命は差し出す」と言われ、岡崎氏は「平和こそが大事である。戦争はしない。平和を守ることが独立を一部揺るがすことである。日本は、アングロサクソンにくつついていければ大丈夫。平和であり続ける」と言われた。

我々は国から与えられた「平和と独立を守る」使命を持っており、自衛隊としては、大変困る話であります。

ただ、このような二人がおられ、極論を述べられたことで、この中間を悩みながら歩いてきたのが政治の世界であったように思います。この意味で、

第1回のシンポジウムに西部邁氏をお迎えしたことは、非常に良かったように思います。

偕行社のテーマは「英霊に敬意を。日本に誇りを。」であります。この「英霊に敬意を。」の意味は、第1が「英霊に感謝の気持ちを持つこと」、第2に「遺族の方々に對する慰問」であり、第3は「後を託す者への激励」だと思えます。こういう人のつながりを大事にするのが偕行社の役目であり、これからも大事にしていきたいと思えます。

最後に、シンポジウムの意味は、討論であります。本日も、多様な意見をお持ちの方をお招きしている。会場の方々も含めて、積極的な討論をして頂きたい。

### ●其調講演・細谷雄一氏（要約）



細谷雄一氏

この偕行社のシンポジウムが今後益々発展することを祈念し、ご挨拶と致します。

私の専門である歴史の視点から、我々が直面している北朝鮮の核開発を含めた危機や中国の海洋進出など、東アジアにおいて緊張を強いられている。このような現状、安全保障上の問題が、歴史とどのような性質のものであるのか、どのように向き合えばいいのか、話をさせていただく。

先ほど、富澤理事長から感動的なお話を伺いました。富澤理事長がご挨拶の中で触れられた岡崎氏は、私の先輩であり、尊敬する先生であります。

岡崎氏は確かに「アングロサクソンと提携していれば問題ない」と書いておられますが、一言私なりの解釈を補足させて頂きたい。

簡単に申し上げれば、その時代の世界を誰が動かしているのか。今動かしているのはドイツではなく、英米である。英米が国際政治の中心にあって、制度、規範を作ってきた。これを覆すのは大変なことである。これはかつて、ナチスやソ連が挑戦して出来なかったことである。

新しい覇権国に交代することをパワー・シフトとかパワー・トランジションと言う。かつてはフランスであり、その以前はハプスブルグ帝国がヨーロッパにおいて覇権国として君臨した。その後、英国が台頭し、19世紀以降に覇権国としてその地位を確立し

ていた。それを米国と共に固めていった。この覇権国に挑戦することが、いかに大変かを20世紀の歴史を振り返ってみれば、明日への対応を学ぶことができる。

現在、国際政治の世界で重要課題になっているのは、中国が米国に代わって覇権国になるのかという問題である。もしそうならば、150年ぶりの覇権の交代である。

中国にそれができるのか、これが現在の国際政治上の課題である。中国が支配する新たな秩序は、我々が今まで慣れてきた世界とは異なるものになるだろう。これに対応するために、我々は、どのような長期的な戦略を練っていけば良いのだろうか。

岡崎先生は、繰り返して「日米同盟があれば何も心配ない」と言っており、ただ、晩年、安保法制懇談会で「少し間違っていたかもしれない」と言われた。

中国の戦闘機の数、在日米軍と日本の戦闘機数を上回った。また、中国の科学技術の開発速度が予想以上に速い。経済成長も止まらない。潤沢な軍事予算を考えると、「中国を日米合わせて共闘するシナリオが崩れているかもしれない。少し考え方を変えなければならぬかも」と言い始めておられた。岡崎氏が疑問に思われたことを、

我々は、真剣に悩み、考え、準備し、そして対応しなければならぬ。

その意味において、年末にかけて作成されると思われる新大綱や中期防を含めた防衛政策は重要である。

中国のリーマンショック後の経済発展は凄いのがあった。これは、政府の財政出動でなされたものだが、経済学者の多くは、独裁国家だからできるので、中国経済は何時か失速するので、中国経済はいつか見えていた。中国経済が米国の経済を追い抜くこと等ありえないと思っていた。

しかし、深圳においてニューエコノミーというイノベーションが大変なスピードで進化している。AIの開発スピードは、遙かにアメリカを越えており、この状況が続けば、影響は大きい。パワー・トランジションの歴史を見てみる。19世紀末までに、英国は工業力や経済力でドイツに抜かれていた。

その時、英国はどうか覇権を維持し、国民を守るうとしたか？

最初、英国はドイツと手を組みたかった。当時のヨーロッパは人種主義が社会に蔓延しており、同じアリア人である英国とドイツが手を組むことは当然であった。しかし、ドイツ国内はナシヨナリズムが勢いを増しており、ドイツが英国の申し入れを2度とも却下した。それで、日英独同盟を模

索し、結果として日英同盟が出来た。

これは、東アジアに限定して考えれば良かったが、グローバルな視点では不十分である。

その後英国は、米国と手を組む方向を選択した。当時、米国は、南米ガイアナの領土問題に介入する英国を脅威と考えていた。一方英国は、かつての植民地であり、反乱軍が作った米国と手を組むこと等論外であった。しかし、

英国はボーア戦争に手を焼いており、政府は国内の反発を排除して、南米の領土権益を移譲し、パナマ運河等でアメリカに譲歩することで手を組むことに成功した。長期的視点で、米国を味方にすることを選択したのである。

その結果、第1次世界大戦、第2次世界大戦、その後の冷戦において、米国と同盟することで戦勝国となることのできた。これは、クラウゼヴィッツの言う軍事力の直接投入を考えた直接戦略ではなく、むしろ同盟や外交を含めた様々な力を用いて究極の目的を達成するというリデルハートの間接戦略の考え方である。

同盟と自立は相互に補完的なものである。自立の精神と独立する力があれば、隷属か植民地である。いかなる国も他国の力を借りて自国の利益を得るのは当然である。

「反共の塊であつたチャーチルは、積極的にソ連と同盟した。その時「悪魔(ドイツ)と戦うために悪魔の力(ソ連)を借りる」と述べている。独ソ戦、スターリンググラードの戦いが始まった時、チャーチルは、独ソの戦力が相互に失われることを非常に喜んだ。

ここで気を付けなければならぬのは、同盟によつて独立心を失うことである。心がけていなければ、依存心が大きくなる。これが同盟の怖さである。個人的には、岡崎氏もこの点を強調されるべきではなかつたかと思う。一方、西部氏に申し上げれば、ヨーロッパの過去の歴史から、自国のために他国の力を使うことは当然であります。

他国の力を借りずに自分の力と意思で自国を守ることに拘り過ぎた例が、ベルギーやポーランドである。両国は、独立心が強すぎて、他国に依存することができず、独立(中立)を追求した結果、ドイツとソ連に蹂躪された。過剰な独立心の結果である。

政治の世界で大切なのは、結果である。これは、日本が太平洋戦争で経験したことである。日本が意図した自分の力で日本を守ることが出来なかつた。この視点で見れば、戦後の日本は、70年間日本を安全に導き、国民を守り抜いた。独力ではなく、他国の力を利

用してきた。この結果、8割を超える国民が自衛隊を信頼している。

この日本が選択した手段は、クラウゼヴィッツの直接戦略ではなく、リデルハートの間接戦略であつた。米、ロ、中の合わせた軍事力を持つことが非現実的であるならば、リデルハートの間接戦略でしかなく、当然の道である。

時間が無くなつてきましたが、お渡しした参考資料にそつて、話をさせていただきます。

### 1 はじめに

#### 独善的な国防論を越えて

● 国際秩序の視座としては、国際政治を点や線で考えるのではなくて面として捕らえることが重要。日本が点で日本を守ろうとするのは大変なことである。今、点で国を守ろうとしているのが北朝鮮である。線は同盟関係であり、かつては北朝鮮もロシアや中国と緊密な関係にあつたが、今や厳しい状況にあり孤立している。面は国際秩序であり、日本として有利な国際秩序を作る

ことである。言い換えれば、国際秩序の中枢に入ることが重要である。現在日本は、国際秩序の中枢に入つているともいえる。例えば、G7サミットにおいて、大きな問題について安倍首相はかなり議論をリードしており、冗談半分だが、ワシントンでトランプ

大統領に政策を提言する一番の方法は安倍首相に頼むことだと言われている。

● 国際情勢の視座で大事なことは、国際関係の潮流を適正に認識することである。1941年、日本は日米開戦を決めるとき、日本では「パスに乗り遅れるな」と言われていた。しかし、1941年6月にはバルバロッサ作戦が開始され、ドイツは2正面作戦に陥つていた。ドイツは2正面作戦をしてはいけなかつた。東西の2正面で戦うために戦力が半分になる。

これを見て、チャーチルは英国の敗戦はないと確信し、米国と戦後秩序の構想のための大西洋会談を開いた。この状況で日本は開戦を決心した。これはドイツが電撃作戦によつて快進撃をしていた1年前の情勢認識に止まつていたことが原因である。

まさに、国際情勢を読むことがいかに大事かということである。

● 世界史の視座という見方として、日本の防衛を世界史の中に位置づける必要がある。

チャーチルがナチスと戦い、苦戦している時に語つた有名な演説がある。「我々は素晴らしい時代に生きている。これほど偉大な運命が、これほどまでに少ない人々の手に握られたことはない」つまり、大変な困難に直面している時、ただ努力だけでは乗り越えられ

ない。その時自分がどういう大事な仕事をしているかを考えることである。

## 2 今世界で何が起こっているのか

・新興国の台頭によってパワーシフトが起きている。これについては、有名な「トゥキデイドスの罫」がある。「トゥキデイドスの罫」とは、約2400年前、古代ギリシヤにおけるスパルタとアテネによる構造的な緊張関係に言及したもので、「新たな覇権国の台頭とそれに対する既存の覇権国の懸念が戦争を不可避にする」という仮説である。

グレアム・アリソンによると、過去500年間の覇権争い16事例のうち12は戦争に発展したが、20世紀初頭の英米関係や冷戦など4事例では、新旧大国の譲歩により戦争を回避した。

中国が覇権国になろうとしている状況を「トゥキデイドスの罫」に当てはめれば、戦争が起きる可能性は高い。覇権国には抜かれるかもしれないという焦りがあり、新興国には追い越したという驕りがある。これが両国の判断を誤らせる。そして戦争は、同盟国の間で起きている。日中の尖閣諸島問題などで偶発事案が生起し、その結果米中戦争が起きる可能性がある。

・地政学の復活という面がある。従来自明であった国際法が大きく衰退している。冷戦が崩壊した時、ブッシュ大

統領は、これからの世の中は、ジャングルの掟の時代から法の支配の時代になると言ったが、今は逆になっている。だとすれば、地政学が復活し、軍事力というものが大きな役割を持つようになる。

グローバル化とナシヨナリズムの相互作用によって、世界はより危険なものになっていく。今、私は防衛費のGDP1・2%を進言している。これも先進国で最下位である。

3 国際秩序はどうなっているのか  
ルールに基づく国際秩序の後退が起きており、繰り返しになるが、法の支配(Rule of law)からジャングルの掟(Rule of jungle)へ移っている。

これからは、むき出しの力の関係になる。象徴的なのが北朝鮮である。北朝鮮がルールや国際的合意を順守せず、国際社会がこれを容認すれば大変である。これは、核開発を巡る米朝の問題ではなく、冷戦後の世界が問われている問題である。

日本は、今こそ法が支配する国際秩序を守る役割を果たすべきである。ジャングルの掟が支配する時代に必要なのは、自助(autobid)強化の必要である。

## 4 国際秩序の2つのビジョン

一帯一路が創る大陸秩序(中国の秩序)とインド太平洋戦略が創る海洋秩序(日米の秩序)は融和しつつある。これから、日中韓の首脳会談が開かれるが、その中で調整し、共有する努力が重要である。日中が対立するのでなく、それぞれの異なるビジョンを調和させる中で共存を図る。

5 日本に何が求められているのか  
この時代に日本に必要なことは、明白であり、防衛力の強化即ち自助と積極的平和主義である。誰に頼るかわではなく、自らに頼るべきである。安保法運に頼る安全はないということである。

このために必要なのが防衛装備であり、防衛能力・防衛技術・装備開発の充実を図る必要がある。このままでは、日本の防衛技術基盤の危機が訪れる。

また、安全保障協力の強化を図り、国際秩序を面であらえて国際社会の中で日本が名誉ある地位を確保し、国際主義の精神の価値を体現することである。

日本は独自の安全保障戦略を構築すべきである。

【講師略歴】  
細合雄一先生  
慶応義塾大学法学部教授

英国パーミンガム大学院国際関係学科修士号取得後、慶応義塾大学院法学研究科政治学専攻博士課程修了。北海道大学法学部前任講師、慶応義塾大学法学部助教授、プリンストン大学客員研究員、2011年から現職。主な著書

『戦後国際秩序とイギリス外交―戦後ヨーロッパの形成、1945―51年』(創文社、サントリイ学芸賞受賞)  
『倫理的な戦争―トニー・ブレアの栄光と挫折』(慶応義塾大学出版会、2009年、読売・吉野作造賞受賞)

## 広告目次

- (株) セレモア……………表紙3
- (株) 東京都民互助会……………表紙3
- ローレルバンクマシ(株)……………表紙4
- メモリアルアートの大野屋……………50
- (株) 武蔵富装……………51
- 信和株式会社……………51
- (株) 和泉家石材店……………52

本誌へ広告掲載をご希望の方は、事務局へご用命下さい。